

# 「紅霞後宮物語」第二部開始記念! 書き下ろしショートショート!

「もう四十歳、か……」

憂えた眼差しでそんなことを呟くのは、四十歳を迎えた当事者ではない。

血縁関係すらない。

「……なんか問題でも?」

だから当事者として閔小玉は、盛大に怪訝な顔を向けてやった。

「いえいえ、なにも問題はないんですよ! ただ僕と娘子の関係も随分と長くなったものだなあと思って」

娘子、と宮廷内における皇后への呼びかけを、楊清喜は口にする。呼びかけられた当事者であり、つまりこの国の皇后である小玉は曖昧に頷いた。

「うん……」

なぜって話が見えないから。

なにを思ってか長年連れそった夫婦のようなことを言い出したのか、小玉には皆目見当がつかない。もちろんこの男、小玉の夫というわけでもない。皇后である小玉には、皇帝という配偶者がいる。名は文林ぶんりんというが、彼についての詳細な情報は今はあんまり関係がない。

清喜のつかめなさに困惑する小玉だったが、しみじみとした態度はうつるものなのか、自身もなにやら感傷的な気持ちになってきた。

振り返れば彼とは、いろんなことを経験した。

まだ若い武官だった小玉の従卒として勤めてもらって以来、彼とはいろいろな経験を共有してきた。

小玉の母の死の際に彼は、服喪中に押しかけて自分も強引に喪に服した。

小玉の部下に言いよって恋人の座におさまる際に、ひと騒動起こしてくれた。

急な命令により小玉が後宮に入る際、なんの相談もなく自主的に去勢してついてきた。

——あれ、むしろこいつがやらかしたことばっかりじゃない?

真理にたどり着いた気持ちになってしまった小玉だが、彼が小玉に全力で仕えてくれたのは間違いない。服喪中に起こった騒動は彼がいなければ手こずっていたし、恋人に対してもとうに亡き今でさえ誠実で、  
後宮に宦官としてついてきてくれたのは心強かった(でも相談はしてほしかった)。

それに清喜のやらかし一つ一つの印象が強いせいで問題児を抱えている気持ちにはなるが、それ以外では小玉の仕事を常に的確に補佐してくれている。

正直、夫よりよっぽど頼りになる……と、これまた真理の一端を掴みかけてしまった小玉は遠い目をする。隣で同じく遠い目をする清喜。

「僕もう、娘子の古女房といっても過言じゃないと思うんですよね……」

しかしその心は、小玉と同じものではない。

「過言だよ」

言下に否定する小玉。さっき「長年連れそった夫婦のよう」とは思ったが、それそのものだとまではちっとも思わない。

なにより、

「とか、あんたが女房側なのね……」

そこがいちばん引っかかる小玉であった。

